此ノ高處ヨリ起ル撓骨動脈及ヒ尺骨動脈ハ其ノ經過中互ニ分離スルアリ或ハ上膊若クハ前膊ニ於テ他ノ動脈ニヨリテ連結スルコアリ最モ單簡ナルハ或ハ大或ハ小ナル横走ノ結合枝ニヨリテ連合スルモノナリ此ノ横走ノ血管ニシテ大ナルキハ吻合枝ト稱ス此ク前膊動脈ノ高處ヨリ分裂シタルモノヲ肘窩ニ於テ結合スル横走ノ吻合枝ヨリ一ツノ迷走動脈ヲ生シ筋膜ノ下ヨリ手掌ニ達シ淺手掌動脈弓ニ終ル又タ此ノ吻合枝ヨリ撓骨返廻動脈ヲ生スルコアリ

上膊動脈經過中上膊ニ於テ二幹ニ分レ再ヒ肘窩ニ於テ合シ更ニ前膊動脈ヲ出スコアリ此ノ變体ヲ上膊動脈幹ニ於テ島形ヲ作ルト云フ　（未完）

抄　錄

◎異常の毛髮發生及重復子宮

A. Heger 氏が十六歳半の一處女に就て知見せる處によれば患者は十四歳の頃より毎月經時不正にして且劇しき疼痛に惱めり、而して其胸部及腹部に於て緻密なる（一五―二〇密迷）細毛の發生せるを證認せり、白條下部の發毛狀態は恰も男子の如く背面の發毛は引いて腰部會陰部に達せり、

毛髮の性質は毳毛の如くにして只强く着色せられたり其佗診査上骨盤は小兒形にて乳嘴は僅に痕跡を認め且恐くは重復子宮にしてHaematometra（子宮腔經血瀦留）あるものと診知したり、實施せられたる手術――膣壁の截開と膀胱の推去とに次で腫物に刺されし套管針より筌兒（タール）樣血膿を外方に泄出せり――に依り遂に此診斷を確定するを得たり

終に著者は異常の毛髮發生と他の發育障害との關係あることに就て注目せり則ち吾人は屢々これが爲めに多くの生理的若しくは病理的現象の疑團を解釋し得れば也

（Beiträge zur Geburtshilfe und Gynaekologie Bd. I. Hft 1.）

◎子宮及其副器の手術後に來れる精神病に就て

Lucas-Championnière氏によれば子宮及卵巢の手術後に來る精神障害は稀有に屬し通常は只素因ある婦人に於て、これを發見するものとす

著者は曾て此三例を實驗せり

第一患者　は著者が兩側亞巢を摘出せしに術後幻覺（Halluzinationen）と進跡妄想（Verfolgungswahnsinn）とを發起せり、但し患者はこれより前き二年間癲狂院に在りき

第二患者　三十歲の婦人にて兩側の卵巢囊腫剔出術を施されしものなり手術後直ちに六週間余、

急性躁狂（Akuʼe Manie）に罹れり此婦人も亦曾て精神變常ありき

第三患者　四十九歳の婦人にして巨大なる子宮纎維腫を膣腔より除去せられしに六週の後急性躁狂を發し數ヶ月に渡れり

纎維腫は粘膜下に發生せし爲め子宮と卵巣と共に摘出すること能はざりき、躁狂の輕快後一二ヶ月を經て著者は子宮卵巣を同時に剔出せり此重大なる手術にも係らず此際一の精神變常をも認めざりき、又此患者は以前神經性現象を持し彼の姉妹も亦癲狂院に在りしと云ふ

（Mcp. moderne 1898. No. 29）

◎肝臓嚢腫の一例

維納のChrobak氏の實驗に依れば四十六歳の婦人――五年來肝臓部に於て徐々に發生せる腫瘍を發見せり、黄疸の發症は認めず、腹部は異常に膨大し（臍囲一一〇仙迷）左側の助骨弓の下部には多數の小腫物あり臍の右部には一の小兒頭大なる球狀形の腫物を觸れ初めに先づ肝臓包虫（Echinococcus）と診知せり、然るに二次的手術上其全く寄生性肝臓嚢腫にあらざることを認めたり、則ち嚢腫の多數は摘出し能はざりしが故に先づ最も大なるものを縫着し次で十日の後切開せり、これが爲め非常に輕快し尚四ヶ月の後も其狀態を保てり

(Wiener klinc. Wochenschuft 1898 No. 14)

◎亞巣嚢腫と誤認せられたる脾臓の格外肥大

Honzel氏が此一例は實に詳晰に報告して頗る興味あるものとす。四十二歳の患婦最近十年間數回嘔吐を兼たる劇烈なる腹痛發作に惱めり又腹部に於て漸次腫大せる腫物あるを確認せり千八百九十七年七月一日以來患者が再び此發作に罹れり此時には熱發し且前回に超越せる發作なりし腹部は強く膨隆し極めて慘痛性にして子宮の位置は後傾に在り前及後腟穹窿部幷びに全腹部は恰も亞巣より發生せる如き實任の腫物に依て塡滿せられき、尙腹膜炎の顯發せしを認めたるが故に直に施術を論告せり此際此腫物は異大なる脾臓なることを表示したり且其前面に腸管癒着し而も容易く別離するを得るものなりき然れとも尙腸管は其後面と固着せるが如く見へし故に根治的手術を避けたり而して腹膜を腹創に脾被膜と縫着し大約脾臓の上面より四横指露出せしを上方三分の二に於て縫ひ沃度ホルム綿紗を充塡せり。處置はジャブーレー氏法に摸倣せられたり其後毎日一、〇のヒニーンを皮下に注射せり、疼痛は全く止み便通、放屁などありし体温は始め三十九度に登り次で直ちに下降せり繃帶交換に際し綿紗は殆んど酒滓色の液に濕潤され脾臓の上面は軟化し毎同脾臓と腹膜との癒着は自から離解せり、四週の後患者は大に輕快し彼は瀉車にて鄕裡に歸り、

家醫爾後の處置を擔任せり

今排泄は益々夥多となり且數度軟化せる脾臟片が共に壞落せり（一五〇－二〇〇瓦）

退院の後十四日繃帶及床は全く斯の液より浸濕せられ創面は增大せるか如く見へし然るに意外！これより壞死せる黑色の大なる組織片顯はれ、疼痛出血等無く全く自然に大人頭大の脾臟塵物は割出し來れり其後創面は速に狹小となり四週を經て頗る健全に業務に就くを得たり

吾人は思ふ此報告の如き實に甚だ注目すべき事項にして又弘く世人に向つて斯る手術の實試を激勵喚起すべきものならむと

殊に癒着の劇しき場合に於ては脾臟切除術は通常其結果殆んと不幸のものなれば也

(Arch. dróv. de chir. 1898. No. 7.)

以上四項　　た、け　生

沃度加里の初期肺結核に對する反應

Norsk mag. for. Lægevid 1897, No. 10.

H. J. Wetlesen 氏を皆て「すちしける」Sticker 氏の沃度加里は初期肺結核に顯著の反應を呈すと云へる報告をば二十七名の患者に就き實驗證明せり、而して其方法に至りては今此所に咳嗽ありて肺

尖僧微の理學的に証明し得る變化を有せる患者に沃度加里三、〇を水二〇〇、〇に溶解し一日三回一食七宛與ふべし、患者果して結核性なるときは著明の氣管枝加答兒を惹起し濕性水泡音等を聽取するに至る而して、往々咯痰を來す此際之れを檢し結核菌を証明し得ふ、Vetlesen 氏は二十七名中五名は此の成績を得、他の十九名は僅に氣管炎を呈せしのみ、而して此等の結核性にあらさる所以は結核爾他の症狀欠如すると少量「ツベリクリン」注射の陰性反應及ひ數年の觀察による患者の健全なるとにより確實なりと云ふ

兎に角此 Stieker 氏法は吾人の尙將來益研究を要すべき好材料ならん

腎臟炎水腫の原因に就きて

Dr. oskar keichel (central bl. inu. med. 1898. No. 41.)

腎臟炎水腫の原因に關しぶらいと Bright 氏以來幾多學說ありと雖も吾人は尙此の數十年間に於ける研究乃結果として僅に其一半をたに確然說明し得べき定說を得さるなり

「ぶらいと」氏は腎臟炎水腫は蛋白質消耗の結果による蛋白減少症 Hypalbuminose 及水血症 Hydraemie により說明せり尙ぐらいんげる Grainger すてわるど Stewart 及ぴばるてるす Bartels 氏等は蛋白質消耗及水分排泄の不足により起る水血性多血症 Hydraemische Plethora は實に本症の原因なり

と「げるとねる」Gaertner 氏は氏等の贊成者となり徐々に靜脈内注入により宵て「こんはいむ」Cohnheim「りひてはいむ」Lichtheim 氏の實驗せし如く只に淋巴腺、內臟及腹膜のみならず尙皮膚水腫をも惹起すべきを實驗せり

「こんはへむ」氏は腎臟炎の或る種類に於ては異常の滲透性を有する皮膚及皮下結締組織血管の炎症性若くは其他の變狀を以て腎臟炎皮膚亦腫の原因なりと想定せり

「せなと－る」Senator 氏は「こんはへむ」に同意し事實的に研究せり抑も最も水腫を合併し易き急性腎臟炎例ば猩紅熱、マラリヤ、感冒に續發せるもの併ひに妊娠腎炎にありては最初皆糸球腎臟炎 Glomerulonephritis なりと而して氏は血液中に循環せる一定の毒物作用により最初糸球毛細管を犯し該毒物の一定の强度を有し且つ作用持續せる時は進んで皮膚漿液膜の血管をも患へしむるに至るならんと

余は「ばせどー」氏病特異の組織變化による水腫及心臟肥大」(S. Grost und o, reichel. wiener med. pras 3. 1892 No. 45 u. 46) なる問題に就き研究し次の決定を得たり、凡て腎臟炎に於ける腎機能の不全は血液中に潛在せる毒物による組織の理學的變性によるものにして先つ最初に水腫を起し亦一方には動脈系の緊張及壓力亢進の結果による抗搏增進の爲め遂に心臟肥大を來すなり

「らんでれる」Lauper 氏は「局所淋巴併びに血液循行による組織緊張」なる業績に於て組織理學

的性質變化は水腫の發生上欠くべからざる要件なるを確定せり而して亦特種の潜在性毒物により惹起せられたる組織解剖的變化は余も亦千八百九十二年腎臓炎水腫の原因とし想定せり

吾人は今進んて腎臓炎に於ける組織は實際理學的に變化せるものならんを組織の機能により直接に証明せんと欲するなり

是に於て腎臓病者皮下組織の吸収力を研究せんが爲め健康人、腎臓病患者併に心臓病により鬱血を有するものに付き試檢せり凡て吸収力は各時差違ありと雖も然も尚豫后斷定上少からざる婚妹ありとす

試檢の方法は身体諸部殊に前膊併に下肢の前面背部蔦骨部に於て比較的輕度の壓により生理的食鹽水の凡そ五、〇立方センテメートルを皮下に注入し其吸収力を試驗するなり、本法は勿論水腫の合併せざる腎臓病患者例は原發性若くは續發性萎縮腎に施行せり之れ已に水腫を有するときは注入液吸収せられ得ざるを以てなり、今試驗液を注入するときは局部に限局せる隆起を生ずと雖も直に瀰蔓し皮膚浮腫狀浸潤と變するに至る

凡て腎臓炎患者は他患者に比し注入液の吸収不良にして殆んと吸収し得ずと云ふも亦過言にあらざるなり、健康人にありては以上の法により注入するときは凡そ一二時間にして消失すと雖も心臓病性鬱血家局所鬱血症(Varices)或は一般鬱血部に注入するときは尚二三日輕度の浮腫を見る而

して腎臓病者には水腫の全く消失に至る少なくも五日乃至十日を要し茲に始めて完全に吸収し終るなり

左に諸氏の行ひし二三の成績を列記し吸収力遲速の關係を明かならしめんと欲す

患者種類	注射部位	水腫持續日數
肉芽性腎炎	右前膊	五日
仝	仝	八日
仝	薦骨部	五日
續發性萎縮腎	右下肢	六日
下肢に浮腫を合併せる骨盤結締織炎	左下肢	二日
両下肢靜脈瘤	右下肢	半日
大動脈孔狹窄鬱血肝鬱血腎(水腫ナキ)	右下肢	七時間
急性感冒性腎炎回復期	右下肢	二日

以上の結果により腎臓病者の組織内液体吸収は健体に比し甚だ同じからさる事明なり而して此等の事實は腎臓炎水腫の起因に關係を有する少からさるべし

滲漏性及吸収性の腎臓炎に際し異常の狀体に陷るは已に「こらにー」Koranyi氏により明なり氏の曰く腎臓は血液に於ける分解産物の排除による血液全交流壓を減却せしめつゝ組織液の新陳代謝により元進せる交流性緊張力を整然たらしむる一器官なりと是れにより腎は血液及組織内液体間に於ける一定の交流壓差を整然たらしむる大なる任務を有するものとす

凡て組織液の正常なる滲漏及吸収は新陳代謝及腎臓機能により齊理せらるものなり

期くの如きにより腎臓病者の組織液吸収力の變化せるを明にして茲に至り嘗て千八百九十二年腎臓炎水腫の原因として報告せん余の業績をは今や實驗的に証明せるを信して疑はさるなり

近視手術に就て

Dr. stood (wiener med. presse. 1898.)

「ドクトル」すとーど氏は千八百九十二年より今日に至る六年間に於て年令十一才より六十六才に至る三十八人の近視患者に四十八眼の手術を行へたり中二眼は六十歳にして七は五十才至六十歳

三は四十乃至五十歳四は三十乃至四十歳十三は二十乃至三十歳殘余の十九眼は十乃至二十歳の壯年なりき

手術の治癒經過中創孔より傳染若くは虹彩脱等なく尚且水晶体脱出をも合併せざりしと云ふすとーど氏は氏の研究に基き次の成績を列記せり

一　近視眼手術は十二D以上のものには危險なく行ふを得ふ然れ雖廣汎なる網膜剝離高度の中心眼底變化若くは最早中心視力の望なき新鮮の網膜出血に禁忌とす

二　手術式は先つ赤道部に注意しつゝ瞳孔中心に於て切開を行へ次て水晶体を按摩し其后可及的長日月の后單線狀摘出術 Einfach Linearextraction を行ふなり、早期白内障を有する五十才以上の患者にありては「ふるるすてる」Foerster 氏の創意せる人工成熟法を行へ次て周囲辨狀摘出術 Peripheer Lappenextraction を行ふべし不熟透明なる水晶体摘出は著者僅に二回なしたるのみ而して充分融解せる水晶体は透明水晶体摘出に重要なる複雜且つ困難の壓出法に反し極めて易く自ら流出するものなるを大書せり殊に前者は虹彩鉗入を安全に豫防し得ると雖后者は常になし得さるなり

三　内壓元進は實に不愉快且つ不穩の狀体に至らしむる者なり故に適當なる豫防法として若し切開を瞳孔中心に止むるときは后害をして著しく減少せしめ若くは一定度に停止せしめ得

るものなり然れは勿論内壓亢進により來る障害を見さるなり

四　網膜剝離の危險を手術の爲め增劇せさるは今日に至るまて諸氏の研究實驗により確實なりとす

五　手術により得たる視力は非常に善良なるか若くは可なり善良なり而して獨り網膜影像の擴大せらるゝにより明了となるのみならず尙網膜機能の回復をも豫期せらるゝなり氏の實驗には六「フアール」は手術により矯正せられたる視力は四乃至五倍六場合は二倍半乃至三倍にして五「フアール」は一倍半乃至二倍半なりき實に此等の數は后來后白內障 Nachstar の完全に治療せられたる際更に增加するを知るべし

六　手術后調節力を眼に些少の不便を感せしめさるより是れ所謂代償性調節機能（Thier）の之れを償ふによる今之れか實例を上けんに手術后正視眼となり無限の距離に調節しあるもの尙近部に於て「にーでん」（Nieben 氏視力表第三號を八—十四ッオールに保ち續下するを得る如き場合は反覆實驗せらるゝなり其他適度の凸面により矯正せられたる遠視眼尙同時に「にーでん」視力表第四號を十五乃至二十四ッオールに於て見るを得るあり是等は其の調節力の存在を示すなり

七　手術后屈折作用は全く靜止し消失す是れ幼年の患者に就き四年半乃至五年の經過中親しく

實驗し得たる所なり

八　著者は多くは一眼に手術を行ひたり然れとも両眼視を得ん爲め適當なる際には二眼に行ふ事あり是れ已に述べし如く手術せし眼尚良く近使用に用され得るを以て患者に大なる苦痛を與へさるなり

綠内障の本性併に該病に虹彩切除の奏効ある理由

Von Alabie.

急性若くは間歇性綠内障にありては其原因眼球前部の血管に關係するものにして毛様突起併に虹彩部に血管擴張を見るなり而して此の部の血管擴張及び収縮を左右する神經は實に虹彩神經叢を通過するなり是れを以て正しき虹彩切除 Iridectomie に際し両者の連關は斷絶せられ從ふて今や血管擴張も消失に歸するなり

然れとも慢性綠内障には上記部位血管の充盈を見すして只脉絡膜組織に血管擴張を見る而して之れか結果として分泌增多を來すと雖も甚だ輕度にして内壓は多くは漸時に亢進するものなり、脉絡膜血管擴張は虹彩血管とは其關係を異にし之れか支配の神經亦虹彩神經叢と關係せず故を以て慢性症に虹彩切除術を施すと雖も奏効なきなり

眼科に於ける「イヒチオール」及「イヒチアルビン」

臨床上「イヒチオール」Ichthyol を身体諸部の擴張せる血管上に収縮作用を呈するの理に基き「うをるふべるぐ」Wolffberg 氏は凡そ四十の患者殊に緑内障虹彩炎に「イヒチアルビン」を内服せしめたり本劑は實に爾他の療法を扶助すること大ありと云ふ亦本藥は眼球后部の出血を極めて速に吸収するの効ありと

右五項

S F 抄譯

◎肝下緣(肝影)ノ視診ニ就テ

(獨乙醫事中央誌第三十六號)

ヒヒレル氏述

肥厚シタル肝臓ハ腹壁ヲ膨隆セシムルヲ以テ臨床上容易ニ之ヲ認知スルヲ得ベキハ明ナリトス併シ肥厚セサル肝臓ニアリテモ其下緣ヲ視診シ從テ其位置ヲ一目確知シ得ルヿ決シテ稀有ナラサルノ事實ヲ次ニ簡單ニ述ヘント欲ス

此現象ハ即チリツテン氏ノ横隔膜現象ニ基クモノニシテ今皷腸ヲ伴ハズ肥滿セズ又緊張、度ニ過キサル人ニ深呼吸ヲ爲サシメ之ヲ注目スルトキハ屢々吸氣時ニ當リ肝臓下緣ニ適當シタル部分ハ陷

凹ヲ呈シ呼氣時ニ當ツテ膨隆スルヿヲ知ル可シ之ニ反シ安靜又ハ淺表ナル呼吸若クハ著シキ肋式呼吸ヲ營爲スルモノニアリテハ心窩部ノ膨隆ヲ呈セサルガ故ニ下緣ノ位置ヲ知ルニ由ナシ要言スレハ深キ腹呼吸ニ當リテ横隔膜陰影ニ全ク一致シタル運動ヲ認視ス可シ之ニ依テ一見シテ肝臓下緣ノ講ヲ認知ス蓋シ若シ充分ニ之ヲ檢知シ得サル場合ニハ打診ニヨリ又出來得可クンハ觸診ニヨツテ確定シ得可キナリ

余ハ之ヲ簡單ニ肝影ト名ケント欲ス而シテ此運動現象ハ肝右葉ニ最モ著名ナレモ左葉ニハ不明ヲ免レズ人若シ側位ヲ交互交換スルキハ一層各个部分ヲ視得ルナラン併シ鼓腸ヲ呈スルキハ此陰影ハ消失シ鼓腸消失スルキハ再ビ顯出ス此際照光ニ關シテ檢者ハリヅテン氏ノ横隔膜陰影ヲ檢スル時ノ如ク患者ノ位置ヲ撰ハサルヘカラサルナリ

如此肝臓陰影ノ觀察ハリヅテン氏ノ現象ノ如ク容易ニシテ單純ナルガ故ニ已ニ此陰影ニ就テ注目セシモノアリシナラン依テ余ハ「リテラツール」ヲ渉獵スルニ左ノ證明ヲ發見シタリ即チ

第一、チールフエルデル氏ノ肝疾患説明中ニ

肝臓ノ僅ニ肥大シ且硬度僅ニ增加シタルキニ於テハ薄キ腹壁ノ患者ニ於テ上下ニ運動スル處ノ肝下緣ニ由テ現ルヽ溝ヲ認ムルヿハ稀ナラズト云ヘリ

第二、フヰールオルト氏ニヨレバ

肝下緣ヲ視得ルヿハ稀有ナリトス唯肝ノ轉位或ハ增大スル𪜈若クハ両者ノ合併ニヨリ下降セル場合或ハ腹壁ノ甚ダ薄キモノニノミ視ルヿヲ得其他又深吸氣ニ際シ横隔膜運動ト共ニ肝臓緣ノ下降スルヿヲ視得可シト

爾他參考書及ビ教科書ヲ詮索セシト雖モ陰影ニ就テ一モ記載ナカリシ余ハチーレフエルド氏説ノ如ク臓器ノ周リ或ハ硬度ノ增加ハ必要ナラズトス即チ余ノ一二ノ例ニヨレハ生活時肝臓下緣ヲ明瞭ニ認知セシモノニ於テ死後剖見ニヨリテ其肝臓ガ通例ノ大サ及ビ硬度ニ於テモ增加ナキモノヲ實見セリ然リ余ハ最早此現象ヲ3/4年モ實際ニ經驗スル所ニシテ両氏ノ云フガ如ク稀有ナルモノニアラズ殊ニ小兒ニ於テハ多クハ反復甚ダ著名ニ現ハルヽモノナリ其他ニハ如何ナル方法ニヨリテ肝下緣ノ位里ヲ定ム可キカニ就テ猶觸打ノ二法アリ併シ觸診ハ悲哉常ニ用フ可カラズ又打診ハ屢々誤謬ニ陷ルヿアリ宜ナル哉此肝影ハ他ノ方法ガ否ム場合ニハ屢々希望セラル可キナリ尚患者ニ一モ障碍ヲ與ヘズ且ツ速ニ檢査ヲ遂ゲ得可ク又屢々腹壁過敏ニシテ直チニ緊張ヲ起スモノニ於テ觸診ヲ行フ可ラザル際ニ安全ニ代用シ得ラル可キナリ

爾他臓器ノ經界モ呼吸ニ伴フ同意義ノ運動ニヨリ陰影ヲ呈スルモノニシテ胃下緣及下降シタル胃ニ於テハ又小彎ヲモ知ル可シ又此際腸ノ陰影モ晴々現ルヽヿアリ蓋シ屢々明カニ一見知リ得可キ外特別ナル胃ノ診斷上利益ニ向ッテ附與スル所少シ然レモ一目ノ下ニ腸影ノ現ハルヽヿアルヲ以

テ擴張セル胃ノ爲メニ薄キ腹壁ノ膨隆セルモノト誤ルヿナキヲ要ス

前記陰影ハリッテン氏ノ脾臟疾患ノ說明ニ際シ大ナル脾腫瘍ノ前緣ヲ視ルヿニ就テ記載サレタルニ基クモノナリ併シ余自身ハ未タカヽル脾臟陰影ヲ見タル一機會ダモナシ

余ハ此報告ガ肝下緣ノ位置ヲ定ムルニハ輕視ス可カラサルヿヲ推奬ス可シ而シテコハ橫隔膜陰影ト共ニ容易ニシテ明瞭ナル觀察ナリ併シ稍々難シス可キハ彼ニ比シテ每回全ク確實ニ現ハレサルノ一事ナリトス

◎呼吸ニ際シ胃及膓界ノ視診ニ就而

（獨乙醫事中央誌第四十三號）

プロフエツソル、ステルン氏述

前キニ獨乙醫事中央誌第三十六號ニ於テピヒレル氏ハ呼吸ニ伴ヒ肝臟下緣ノ視得可キ事ニ就テ簡單ニ報告セル中ニ其他臟器ノ經界モ呼吸運動ニ附隨シテ陰影ヲ呈スルト云ヘリ即チ胃下緣又ハ下降セル胃ニアリテハ小彎モ陰影ヲ呈スト實ニ然リ然レモ氏ハ胃ノ診斷上檢査ニ於テ只僅カニ價値アリト云ハンカ余ハ其說ニ服スル能ハズ飽マデ其價値アルノ点ヲ明言ス可シ

余ハ曾テ二年前偶然ニ之ニ付テ注目シタル以來深呼吸ニ當リ胃ノ概型ヲ視得ヘキ診斷上有益ナル

点ヲ攫得シタリ即チ胃ノ下垂セルモノニシテ小彎ノ呼吸時ニ移動スルトキハ一目シテ其位置及擴張ノ度ヲ認メ得可シ而シテ素ヨリ强度ニ羸瘦シタルカ或ハ著キ胃ノ膨隆ニ際シテハ其概形ヲ知ルニ他ノ法ヲ要セサルハ勿論ナリト雖モ其他ノ檢査法ヲ用ヰサル可ラサル時ニ際シ此視診法ヲ用ユルトキハ一目瞭然タラシム

此際注意ス可キ要件トシテハ被檢者ハ地平位ヲ取ラサル可カラズ又ヨク照光セラルヽ樣ニス可シ（余ハ頭部ノ方ヨリ來ル光線ヲ用ユ）而シテ又餘リ肥厚緊張ヲ呈セサル腹壁ニ於テ胃ノ一定度ノ充盈ト腹壁ニ接着スル腸ノ充盈ハ緊要ナリトス、此ノ現象ハリツテン氏横隔膜現象及ヒ肝下緣ヲ認知スルト同樣ニシテ皆共ニ呼吸時腹壁膨隆變化ニヨルモノナリ而シテ之ヲ知ルニハ前要件ヲ悉クサヽル可ラズ併シ胃及腸概型ハ横隔膜現象ヨリ稀ニ知ラルヽコハ告ケサル可ラズ余ハ毎時腹壁視診ニ際シ此運動現象ノ價値ヲ謝セスンハアルヘカラズ

「ピロザール」ト「フエノゾール」ニ就テ

（獨乙醫事週報千八百九十八年十月十三日四十一號）

一等軍醫　ブルクハルト氏述

余ハ、今回ヘツフス氏ノ命令ニヨツテ解然藥若クハ鎭痙藥ノ二新藥ヲ披露ス可シ。コノモノハ、

當地ノ「リーデル」化學品製造所ニ於テ製出セラレ、第一醫科大學「クリニック」ニ於テ、實際略一年間治療上ニ應用シツヽアルモノナリ

其一ハ、「ピロサール」ト稱シ、其構成ハ酸性「サリチール」醋酸、「アンチピリン」即チ $C_9H_8O_3$、$C_{11}H_{12}N_2O$ ナリ。其二ハ、「フエノゾール」ト稱シ、「サリチール醋酸、「ペー、フエチチヂツト」ニシテ、其構ハ成次ノ如シ $C_6H_4 \langle {}^{OC_2H_5}_{NH.CO.CH_2O.C_6H_4.COOH}$ 両製劑ハ、共ニ微細鍼狀或ハ板狀ノ結晶ヲ形成スル白色粉末ニメ、「ピロサール」ハ「サリチール」醋酸 $C_6H_4 \langle {}^{COOH}_{OCH_2COOH}$ ト「アンチピリン」ノ直接混合ニヨリ生成ス。「サリチール」醋酸ハ無色ニシテ、百八十八度ニ鎔解シ、冷水「エーテル」、及ヒ「クロロフホルム」ニ難ク、熱水及「アルコホル」ニハ容易ニ鎔解ス、「アンチピリン」ハ水「アルコホル」、及ヒ「エーテル」ニ難ク、百四十九度—百五十度ニテ鎔解シ、酸及鹽基ニハ「サリピリン」ニ似テ、彼ノ成分ニ分解ス

「フエノゾール」ハ「サリチール醋酸及ビ「ペー、フエチチディン」ヲ百二十度ニ熱スルニヨリ生成シ、百八十二度ニテ鎔解シ、水「エーテル」、及冷「アルコホル」ニハ困難ニ、熱「アルコホル」ニハ容易ニ鎔解スモシ「アルカリ」鹽ト共ニ熱スルトキハ分解ス可シ「フエノゾール」ノ那篤倔謨鹽ハ水ニ溶解シ易キ特点アリ

両者ハ、苦ク又酸味ヲ呈ス、併シ尤ヨリ人々一様ナラズト雖モ如何ニ過敏ナル患者ニアリテモ、

曾テ嫌忌スルモノナシ。モシ投藥ノ際「オプラート」ヲ與フルカ、又ハ牛乳、柯々阿、咖啡、或ハ類似物ト和スルトキハ、其味ヲ蔽フコヲ得可シ

此物ハ胃及腸壁ニ達スレハ更ニ彼成分ニ分解シ、又尿中「サリチール」酸反應ノ速カニ顯出スルニヨリ、其吸收ノ容易ナルコヲ知ル。而シテ患者ハヨク之ニ堪ユルモノナリ。副作用トシテ僅カニ汗分泌元進ヲ呈スト雖モ、決シテ「サリチール」酸ノ如ク過度ナラスシテ何モ障碍ヲ來スコナシ。爾他耳鳴、眩暈、頭痛、昏瞶、嘔吐、心悸元進、發疹或ハ其他ノ中毒症狀ハ一モ來セシコナシ

療法的價値ニ就テハ、其一々ノ成分ガ已ニ僂麻質斯藥若クハ鎮痙藥中最モ適當ナルモノニシテ、又實際應用ニ當リテモ、其一々ヲ用フルヨリモ合用スルトキハ通例良効ヲ得ルモノナレハ、無論其良作用ヲ得ルハ明カナル可シ。然リ實地上ニ於テモ、誠ニ有要ナルコヲ証明セラレタリ、

彼ノ組成ニ附キ、尙詳言スレバ「ピロサール」ハ五〇%ノ「アンチピリン」及ヒ三六—三七%ノ「サリチール」酸ヲ。「フエノゾール」ハ、五七%ノ「フエナチエチン」及ヒ四三%ノ「サリチール」酸ヲ含ム。用量ハ共ニ一回〇、五一日二—六回、多クハ四—六回、稀ニハ二十四時間中ニ一—二回ニテピロサールノ一、〇宛ヲ用ヒタルコアリ、又少キ塲合ニハ「フエノサール」ノ〇、二五宛ヲ與ヘタルコモアリ」

以上ノ成蹟ヨリ、余ハ、両者ノ應用上至重ナルコヲ信ズ。併シ僂麻質斯又ハ神經痛患者ノ特効藥

ト云フ能ハズ。又急性僂麻質斯ニ合併スルヿ多キ助膜炎、心囊炎或ハ心内膜炎ヲ防クノ力ナシ、加之其再發ヲ防遏スルヿ能ハサルナリ。又時トシテ奏効ノ不確實ナルヿモアリ、コハ蓋シ他藥ト雖モ免レサル所ナリ。而シテ此際陰性ノ結果ハ「サリチール」酸及從來使用シ來リタルモノニ比シ其場合ハ少シトモ斷ズル能ハズ。著者ハ、尙患者ノ簡單ナル病歴ト、熱度表ヲ示シ。之ニ應用シタル本藥ノ奏効如何ヲ明示セラレタリ

「メタクレゾールアニトール」ノ丹毒療法ニ就テ

（獨乙醫事週報一千八百九十八年十月二十七日第四十三號）

ドクトル、ウィルヘルム、ケルツエル氏述

ゲハイムラート、レフレル氏ハ、前キニヘルメル氏ガ「イヒチオール」ヨリ得タル「アニチーン」及ヒ「アニトール」ニ就テハ種々ノ試驗ヲ施行シテ、其主要且ツ興味アルモノニシテ、殊ニ從來ハ水溶液ヲ得ル能ハザリシニ、今ハ「アニチン」ノ存在ニヨリ有力ナル防腐液ヲ得ルヿヲ報告シタリ。尤ヨリ「イヒチオール」ハ有力ナル防腐藥ニシテ、皮膚及ビ粘膜ニ外用スルトキハ、ヨク組織内ニ攝取セラルヽハ已ニ明ナリ、而シテコノ有力ナル「アニチン」及ビ一層强キ殺菌藥ナル「アニトール」ハ、無論細菌性皮膚及粘膜病症ニ對シ、爾他已知ノ有名ナル消毒藥ヲ凌駕シテ、有カナル拮抗ヲ

營ムモノナランカ。又動物組織内ニ於テモ、試驗管内ノ觀察ニ等シカル可シ。然リ今動物ニ病毒ヲ接種シ喚起シタル、局部病六竈ニ、此藥物ヲ接種又ハ塗擦スルキハ、其病勢ヲ挫キ或ハ著名ナル影響ヲ被ラシム。尙次ノ疑問ニ對シテハ、レフレル氏ハ、實際ニ、「モルモット」ノ傳染創及之ニ實布垤里ヲ接種シテ、良効ノ結果ヲ收メタルニヨリ、最早一点ノ疑雲ナキヲ致セリ。次デ彼ノ速カニ蔓延スル恐ルベキ丹毒ノ試驗ハ、今將サニ試ムベキ秋ニ至レリ

コヽニ於テレフレル氏ハ、余ニ動物試驗講究ヲ命ジ、殊ニ此際家兎ノ耳ニ同菌ヲ接種セヨト云ヘリ。是レ本病ハ人ト家兎トハ同シキ方法、組織及同種菌ニヨリ惹起セラレ及ビ同樣ノ熱經過ヲ取ルモノナルニヨル、此ニ於テカ詳カニ病勢ノ進歩停止ノ狀況ヲ知ルヲ得テ今ヤ進ンデ從來人体ニ於テ甚タ難シトスル本病ノ療法上價値ヲ確定セント欲シ此際ニ種々ノ藥物ヲ應用シタル中、最モ克ク「メタクレゾールアニトール」奏効ヲ呈スルヿヲ明知シ得タリ

本藥ハ、四十%ノ「クレゾール」ト、六十%ノ「アニサン」(ヘルメルス氏發見ノ三三、三分ノ一%ノ水樣液ナリ)ヲ含ム。應用ニ當ツテ通例三%、稀レニ一%ノ溶液ヲ用フ、但シ%數ハ「メタクレゾール」ノ含量ニヨリ算定ス可シ

(以上四項在福井八田生抄)

久保武

第七號抄錄正誤

抄錄

○第一項　表題中女子生殖の下「器」字を脱す

○同項中　Schwache Wenstrudtion は月經過小と譯して可也

○第二項　分娩後子宮の Atonie は無力の誤譯

○同項中　第四日にして子宮全く Curettirt（收縮）せりは子宮を搔爬せりの大誤謬！

○同項中　「特に彼れは醫師たるもの常に先づ」の以下　Reine Puerperale infection（純產褥傳染）に就ての誤植

○第三項　中度の困難に接するも餘り長き Exsbectativ（自然良能を待つ法）とあるは臨機の處置と訂正す

○同項中　又一樣に筋腫出血に依て起されたる貧血に於ても常に禁忌となすは禁忌に屬すること稀なりの誤解！

○同項中　筋腫の一側の困難の高度云々中「一側の」三字削すべし。尙同項中管（消）耗せる出血とあるは大出血の誤

漫　錄

◎卒業生を送るの序

天高くして水の如く、月は皎々として鏡の如し、桐風樹に觸れて颯々の聲をなし、池水清く澄んで鴻雁の影を映す、男兒の快心曷んぞ此時に過ぎんや、況んや醫學の鵬翼漸く成り、名譽の桂冠を手にし、進んで社會の活路に立ち、生殺の大權を主宰し普ねく蒼生の疾苦を濟はんとする、我四高校醫學部四十餘の卒業生が心裡果して如何ぞや、是れ偏に諸君か夙夜孜々として能く螢雪の勞に耐へ、錐股の苦に克ちたるの効果にして今日の快ある豈偶然にあらざるなり、吾人は玆に諸君の光榮ある卒業を祝すると同時に、將來益々最新の學理を玩味し豊富の學と卓越の識とを揮つて一意斯學の爲めに力を盡されんことを望むものなり、思ふに我國の醫學は今や燦然として一瞬千里の進歩をなし、俄然として萬國に雄飛し、恰も梅花櫻桃李一時に開くの盛觀をなす、昌なりと謂ふべし、然りと云へとも學海は尚未だ渺茫として爲すべきの事業一にして足らず、而も其多くは泰西人の腦漿より絞り出され、泰西人の手に養はれつゝあるを思へは、我國醫學者たるものは一日も早く自家獨得の見識を立て、彼の長を取りて我が短を補ひ、東西融化混淆して日本醫學特殊の光輝を發揚し、優に宇内人士の瞻望渴仰するに足る事業を成就せざるべからざるなり、諸君は實に此の山よりも重且大なる責任を負へるものにあらずや。

天然の人心を左右するもの甚大なり山水秀麗の地能く偉人傑士を出すと、吾輩屢々之を耳にしぬ、蓋し我北陸の地、山秀にして水麗、白山は

巍乎として高く聳へ、信濃川は洋々として清く流る、仰かん乎、以て其美を賞すべく、俯さん乎、以て其清を喜ぶべし、萃乎として青雲を貫く、眺めて以て思想を高尚にすべく、滾々として息まざる、臨んで以て希望を遠大にすべし、此間豈一大醫豪の出づるなからんや、奮起せよ四高校卒業生諸君！

吾輩は尚諸君の健康を祈ると共に諸君が本會の爲めに盡されたるを謝し且つ長へに本會あるを忘れざらん事を切望して止まざるなり、

嗚呼松本善次郎先生

四圍既に春來の榮を矢ひ樹子蕭々梧桐の雨鳥を迎る切々飛雁の聲を聞く萬家秋意寛たらざるはなし一夜起て大空を望めば明鏡の裏萬燭の玉兎を藏めて皓々天地灼として雪の如し清乎凄乎鐘音遠く到り虫聲近く襲ふ嗚呼身は既に是れ秋天の客擾々紛々百感交々至り頭を垂れて沈思すること多時

忽ちにして蓬々の雲一陣の怪風に從て起り群峯曇を流して四海遂に暝朦雨脚漸く加はり滴々地を打つて聲あり何等の變幼ぞ鬼火明又滅悲哉是れ松本善次郎先生の靈に因るものならんとは

先生起て我校に教鞭を取りしより既に十數年聰朋博識子弟敬慕せざるはなし本會創立の擧あるや東奔西走私事を棄て會務に秩掌せらる茲來發行の任にあること數年規矩漸く定まり盛美日に加はらんとす

天の不仁なる此時に當りて過日の雲と共に先生を萬里の地に送る

先生數年肺疾を病ふ嘗て意となさず知人之を誡むるあるも洒然笑ふて答へず春來病勢重きを加へ瘦削蒼顏弟子密に以て危しとなす而も未だ業を廢せず起たざるに及んで乃ち止む

嗚呼人世五十天賦に生れて天賦に死す死生素より天にあり然りと雖も胸裡萬丈の氣焰を痛めて止む恨み士是より大なるはなく不仁天是より大なるはなし不幸弟是より大なるはなし

玉樹摧けぬ明星隕ちぬ北邙山上一塊の土長に先生の英骸を藏めて空く寒月に對するのみ悲哉

吊意敬で墓前に詣ずれば萬籟樹梢に起り寒鴉啞々凄然淚雨の如し嗚呼悲哉

銕腸漫錄　松原銕腸

（其八）　易水歌

わしはやき
月日のみちに闘やなき
　春の色香のさめやらず
　かべの緑うつろいて
秋の落葉にしぐれ初め
　はや木枯のすさびつゝ
　きのふは今日の昔かや
ねくふかき

●漫　錄

學びの庭にわけ入りて
くすしの花を尋ねしは
げに四つとせの昔にて
すぎにし跡を見返れば
うすき霞のたなびきつ
はかなき夢のあと淋し
せひぞなし
苗にや譬ふおのが身も
敎への親につちかわれ
のどけき春の風に浴び
めぐみのつゆに沾ひつ
くれなゐ匂ふ花咲きて
實らんものと思ひしに
はかぞなし
遂にたとふおのが身も

まことの涙ぬぐひてし
友てふ麻に生ひ立ちて
もつる思をときしずめ
朝な夕なにかたりつゝ
ながく共にと誓ひしに
おもはじな
はるは千歲に變らざる
みどり色濃き野の末に
共に歌ひて暮れにしを
あきは萬世朽ちせざる
月のひかりに酒汲みて
明け行く空を恨みしを
まよはじな
ひとのゆくへは白雲の
あふかと見れば又散て

森の彼方にわかれ行く
みたらし川に浮く星は
今もむかしに更らねど
移り絶ゑせぬ世の態に
なげくまじ
よしや幾重のやま川を
距てゝともに恨むとも
視のうみのかわかずば
今はなみだに別れつゝ
谷の樵夫路に迷ふとも
れなじ高峯に花折らば
うらむまじ
墨田のふちに掉さして
つきの桂をいだゞきつ
今をむかしに語りなば

文のはやしのれく深く
錦をりなすもみぢ着て
故郷のみづに寫しなば
× × × × ×
× × × × ×
行く水のながれさためぬ飛鳥川
またの逢瀬に月そやとらん

解剖美人

殘紅生

一

ありし其世の戀もさめ
情けも枯れてけふはしも
固く冷たき臺のゑに
淋しく伏せる乙女子を
我れの見し時一すじに

思ひそみたりそが胸に
ひそむ恨みのいかばかり
盡きず此世に迷ふやと

二

今ぞ斯くあれ面影の
また世にありし折柄は
いかに見よげにありけむを
哀れ黑髪剃り取られ
ゆたけかりけむそが頰も
肉や落ちたり色も消ぬ
眼窪みて鼻たかく
見る影とてはあらぬなり

三

ひと葉散りけむやなぎ葉の
眉は恨みの色を浮け
噤みし口や閉ぢし目は
云はぬ思ひを語るらし
胸に燃ゆにし紅いの
情けの焰消へ果てゝ
名殘りの色や紫に
乙女が身をば染むるなり

四

形もあらず閉ぢられし
まぶたもいつか一度びは
熱き涙をたゝゆにし
折もありけむさりながら
もゆる思ひに言葉なく
まなこに夫れと語りたる
時もありけむさりながら
今は又見むすべもなし

五

恨みや滿てる一文字に
固く結びし唇も
やさしきゑみの漏れいでし
析やありけむさりながら
語りつ問ひつしめやかに
千夜をひと夜と明かしたる
時もありけむさりながら
今は聞くべき聲もなし

六

思ひの泉戀の川
あふれ流れしそか胸も
玉を展べつと歌ひたる
かいなもはぎも憔れ果て
骨高やかにそば立ちて
柳はいづらそが腰は
哀れ枯木を朽ち果てぬ
流る血汐も止まりて

七

戀しき人のそが前に
立つとも彼は見ぬなり
戀しき人のそが耳に
告ぐる情けも聞けぬなり
今一度びの言葉をと
戀しき人の願ふとも
うしや其くち何事も
告ぐる能はで噤むなり

八

若きくすしはメス取りて
今しも彼を剖かむとす

重きが上の小夜衣
人につゝみし肌へしも
けふ此室にさらされて
知らぬあだ男の手に觸ぬ
かゝれとてしと乙女子は
いくせの年をは經べりけむ

九

悲しからずやなれ乙女
天の職なりわか人の
世に恐ろしきやいばもて
優しき人の情けをば
宿せるなれが胸のへを
涙もあらでさりさくも
さはれ乙女よ恨めしと
ゆめな思ひそ神かけて

十

唯若人は國の爲め
又人の爲め身のために
なれがむくろを借り來り
戀も涙も世の外に
捨てゝメスをば取れるなり
當つる刃の冷たくも
人の心は其まゝに
げに冷たくもあらぬなり

十一

眠れ乙女よやすらかに
なれがとうとき身を借りて
學びのしろとしたりける
其もろ人は末かけて
れひし惠みは忘れまじ

哀れむくろは朽るとも
なが面影はわか人の
胸に永くも刻まれむ

十二

春は花咲く曙に
秋は露散る夕暮に
なが亡きたまを吊へる
やさしの人は絶えざらむ
墓のへ清く掃はれて
うら立ち昇る香煙は
とはに絶えまじ卯辰山
松の梢のすきもれて

解剖美人の後に加へて

竹軒生

『美人我知れるにあらず
知らざるにもあらず』
時は秋野に山に花もなく葉もなし自然は生者必滅の理を顯はし昨日時の錦と歌はれてる紅葉これも三日の眺めに消へ去りぬ
夫れ春は來る秋花は吹く嵐思へはこのあたり最ところもとなし散る爲の花か葉か秋
さりながら人世は五十と數へられ花は蕾に散るが數なるにまだ蕾の美人散る花と聞けば
○開かんす蕾は雨にうたれけり

一件三行

松浪生

○名けて一件三行と云ふ蓋し三行一件をなせは也記する所片々啻に先筆の向ふ所に從ひしのみ希は讀者紙上を汚すの罪を訴ふるとなくば幸甚

○世豈に　不可思議の事なしとせんや既に不可思變の字あり佛に南無不可思議光如來あり不可思議の事なかる可らず儒者亦曰く大極は無極也と

○某僧曰　見る聞く嗅き味ひ身に冷暖堅軟の相を知り心に是非得失有無の見を起す此中自ら疑ふて決着する事不能者之を不可思議分際と名くと○夫然り　不可思議の事を以て全く地を掃はしめんとするの希望は啻に一人の抱負に非ず吾れ然り井上圓了然り哲學者然り然れ共能はざるべし○我却て　未可思議の言初て聞初て見る寧ろ之の言を以て不可思議の事とせん、未可思議の言可思議に歸するとあるか否永く不可思議か

○去る者　茫々來る者亦茫々來る者は喜で迎ひ去るもの日に疎んずるは常理の數のみ余輩之に數へられん事を欲せず然れ共遂に能はざるなり

○翁敎ゆ　世人みな狹布のはそ布きたるらし道語らへば胸あはずして。實に然り盟友鐵腸鐵牛共に去て遠く遂に我が肚裏を語るべき者漸く希

○問者曰　人の天性は善耶不善耶、我知らず然れ共答へざる可らず言て曰く宜く天性を知らんと欲せは其現在に徵すべしと、否乎識者敎へよ

○人誰が　常に滿足を得る者余輩校門にあるや亦然りき然共不滿の中に經過せり、寧ろ校門にあるや余輩をして言ふ事能はざらしめしが故に

○松浪生　去て居を卜するや宏大繞すに廓あり壕あり起るに喇叭あり伏す時然り食ふ時亦然り此時に及で已往を追想す吾不滿とせし者全く空

○此故に　余は不平者に送らん滿足する者は幸福なりと、余輩不平の極之を言はざる可らざるの境に當れり然れ共我れ悟れるに非ず、吁嗟！

○古聖云　水は方圓の器に從ひ人は善惡の友に據る友擇ざる可らず、亦曰く友擇ざるとも可已の志想堅固ならば足ると其云所彼我全く反せり

○爲に　古聖の言と雖余輩初學の徒を迷しむる事甚し孔子曰く悉く書を信ずるは書なきに如かずと茲に於てか知る自己の判斷力の緊切なるを

雜報

○第十回通常會　十月九日午後一時より本校控所に開き先つ北條會長開會の辭を述べ併せて一同に告ぐる處あり次て左の講話あり

「グリコーゲン」に就て　高山正雄君

「ウィダール」氏反應ノ「デモンストラチオン」上田計二君

去月發行讀賣新聞明治の醫者談中の赤痢病特効藥に付て（附薄荷油あり薄荷腦結晶を作る事）　高山基重君

右終りて一同和氣陽々茶菓を喫して散會せしは六時なりき尙當日下平用彩君の（「マッサーゲ」に就て）講話あるべき筈なりしが病氣の故を以て親咳に接するを得さりしは遺憾なりき

○秋季陸上大運動會記事　竹軒生投

一年一度の腕ためしいで試みんいで爭はん蒼顏白手我黨の士に非す壯士手に唾して挨たる運動會天長節の佳辰を卜して行はるべきも雨降りぬればやんごとなし天公の不仁に三日の肩いれさては十一月六日一天名殘りなく晴れぬれは號砲一發擧行を報し今日はと集ひ來る辰章七百綠門には「天得一以淸地得一以寧」の句を傍書し

運動會の篆額を揭く皆菊花を以て刻めり旗幟數百條棚の四囲を遶らし彼處此處の接待茶屋揃も揃いし竹飾り青葉の枝に雜らしたる一夜造りのむしろ細工妙は粗なるにあり勞ひ如何にや御入り御出の賓客ひきもきらず

追々に集ひ來る傍觀者柵の周り幾重にもふちづけて今は立錐の餘地もなし二町四町一人一脚武裝競走旗取競走回を追て競はるゝ合圖の砲と共に飛出る壯丁足早くとも運は火にある提灯競走磨り付火の數度か消へ疾くや速くやとあせる隙先を越されて茫然と提灯棄てゝ歸るあり朋又滅腰折りて火燼伺ひ走るあり急く塗炭に燭落ちて提灯燒くも面白し急けは消へ急かされは後る惟た命は是れ匙上の球今や危きこと極りなし氣許しのならぬこと「スプラン」競走は提灯競走にも優るへし球にのみ注く目の向見す前者の腰はては柵なんとに觸れ見事落す樣哀れとも曰ふへし長は長と短は短と組合の二人三脚競走左右足蹈み出す調を失て轉ふあり戴囊すり落し我を知らすに走るもの心ひき立ち居れはさもあるへし猿猴の枝を渡りて梢の花を爭ふて歸る繩土り旗取り無邪氣なること今日の競技第一と聞ゆ小兒時代の椀白を證すなど曰ふは邪言脫兎の勢も忽ちに綱の目に障られ二三人五六人重り疊んて一しきり大悶者前者の肩に道を得て素早く飛出す利口者憐れや深田に馬を乘り入れて打てど進ます止ぬるかとかこつあり心は先に急けとも足我儘ならぬ達法師轉ふも愛嬌起るも愛嬌文壇競走五色球投け寶拾ひ竿上り寶取りなんと餘興の種々も其折々にはさなれつ競技の數も盡ぬれはとゝ

一力瘤藏めて歸る今日の日や晩鴉時に急く頃」

因に記す　當醫學部中强中の强の者と聞へしは田中秀夫、米澤泰次、駒井定哉の三氏なるへし田中氏の障碍物米澤氏の徒步競走眼中既に敵なしと見ゆ駒井氏小身なから何時も見事に先取つたり感心と曰ふの外なし之に次ぐ者藤原敏夫、村田讓、橋本喜久三、兒島亮吉、高澤辰之助の諸氏なるへし

○卒業證書授與式　第四回醫學部卒業證書授與式は十一月十五日午前第十時本校講堂に於て擧行せらる來賓として齋藤海軍々醫中監望月海軍大軍醫上田裁判所長河西檢事正椙山大林區署長鏡農事北陸支場長縣立各學校長卒業生保證人等の臨席あり順定まるや北條校長開行の辭を述へ松原三郎氏以下順次に卒業證書を授與し了りて滿腔の希望を演へ懇々訓諭せらるゝ處あり次て高安醫學部主事例により學年經過の報告を爲し醫士の前途多忙にして其責任の輕からさることを統計を示して縷々諭告せらる續て醫學科卒業生總代松原三郎氏藥學科卒業生總代山岸理一郎氏相次て最と嚴肅に答詞を朗讀し午前十一時式を終ゆ時に齋藤軍醫中監場の一偶より北條校長に導かれて登壇せられ先つ海軍醫官一般狀況より其待遇進級等細則に至る迄滔々數千言以て全醫學生に通告せられ終りに本日の盛典を祝して降壇せらる

當日卒業証書を授與されたる諸君は左の如し

醫學科三十六人（醫學得業士）

松原　三郎（石川）　藤井　助雄（富山）

生沼　曹六（石川）　渡　孚貞（朽木）

筑築　末雄（福岡）　高橋　常作（新潟）　田中　吉六（石川）　平尾儀八郎（富山）
番場　友平（石川）　渡邊久壽松（新潟）
藥學科四人（藥學得業士）
石森　國臣（福井）　久保　武（石川）　山岸理一郎（石川）　海老池彖助（京都）
池田　耕（石川）　關屋林之助（石川）　山崎清一郎（石川）　辻村　堯信（石川）
中野　玄次（長野）　間部　豊（福井）
右諸氏の方向は次の如し
中野　方幸（石川）　寺本　近松（山梨）　松原三郎君　醫科大學撰科に入り病理學研究、
北川　健三（石川）　酒井　政吉（石川）
駿河　尚庸（石川）　森田　齊次（富山）　藤井助雄君　金澤病院醫員に任せられ眼科部勤務、
田中　健次（石川）　山田　義忠（石川）
田中一次郎（石川）　牟田　亮吉（石川）　生沼曹六君　東京痘苗製造所技手拜命種痘科勤務、
高澤　清松（石川）　百谷　義一（富山）
竹多乙三郎（石川）　崎　達郎（富山）　渡　孚眞君　鄉里宇都宮に歸省右川堂醫院にあり、
澁谷　孝慶（富山）　田中　正一（石川）
田代　保二（新潟）　重本　儀介（山口）　筑紫末雄君　東京痘苗製造所技手拜命種痘科勤務、
神谷貞次郎（石川）　神保　正長（石川）

高橋常作君　越後三島郡出雲町に開業、
番場友平君　一年志願兵として金澤歩兵第七聯隊第五中隊へ入隊、
渡邊久壽松君　郷里に歸省攝養中なりしか近々上京せらるゝ由、
石森國臣君　我か醫學部病理學副手拜命、
久保　武君　金澤病院醫員拜命婦人科勤務、
間部　豐君　赤十字病院内科へ奉職、
池田　耕君　一年志願兵として鯖江歩兵第三十六聯隊へ入隊
關屋林之助君　金澤病院醫員拜命婦人科勤務
中野玄次君　同上にて外科勤務、
中野才幸君　海軍少軍醫候補生に受任、
寺本近松君　本部内科第二部副手たりしか去る一月讃州高松病院醫員に任せられ赴任、
北川健三君　一年志願兵として歩兵第七聯隊へ入隊第五中隊とあり、
酒井政吉君　上京せられ專ら獨乙語研究の由
駿河尙庸君　東京淺草區好生堂病院に奉職、
森田齊次君　郷里に歸り開業の準備中、
田中健次君　加州能美郡長野村にて開業、
山田義忠君　越中市立富山病院に奉職、
田中一次郎君　一年志願兵として歩兵第三十六聯隊へ入隊、
半田亮吉君　能州私立七尾病院に奉職、
高澤清松君　北海道後志國岩内病院に奉職、
百谷義一君　一年志願兵として金澤歩兵三十五聯隊へ入隊、
竹多乙三郎君　美濃國岐阜病院に奉職、
崎　達郎君　本部内科第一部副手たりしか舊

臘大聖寺病院醫員拜命赴任、

澁谷孝慶君　一年志願兵として歩兵第三十五聯隊へ入隊、

田中正一君　同上にて歩兵三十六聯隊入隊、

田代保二君　本部內科第一部副手拜命、

重本儀介君　能州なる私立第一七尾病院に奉職眼科專務の由、

神谷貞次郎君　歩兵第三十六聯隊へ一年志願兵として入隊、

神保正長君　同上、

田中吉六君　金澤止善堂病院に奉職、

平尾義八郎君　金澤仙石町なる自宅にありて保養中、

以上は醫學科卒業生の動靜なり尙藥學科卒業諸君の動靜は次の如し

山岸理一郎君　一年志願兵として歩兵第七聯隊へ入隊、

海老池彖助君　鄕里京都府伏見町に開業、

山崎清一郎君　一年志願兵として歩兵第三十五聯隊へ入隊、

辻村堯信君　自宅にありて病氣攝養中、

●卒業祝賀會　十一月十二日醫學科卒業生の爲めに野田寺町古今亭に開かる會場の莊飾万端整へ午后五時數發の烟火と共に劉朗たる奏樂開會を奉するや澤信吉氏發起人に代りて開會の辭を述へ河內監次郎、中島擴三氏の祝辭あり次に北條校長卒業生諸君に告けられて曰く、

諸子は幾星霜の間研鑽琢磨を重ねしの結果遂に今日の榮を得たるは實に祝賀すべき事なり然して諸子は入學以來一に身を素養に汲々し

不明瞭の点は各々師てふ人に質して万事を所し來りたりと云ふへし併れとも今後は諸子の擧動は悉く責任ありて他に質すへき便宜もなし諸子幸に今日の幸榮あるを紀念とし自ら戒むる處あれよと

次に高安主事は温言以て左の如く卒業生を諭さる

乳臭尚未た脱せさる幼兒か日頃修めし舞踊の温習を爲すに當り傍見する師匠の如何に心を勞するかを知れ双眼は舞臺中に表はれ居る一兒の身邊を繞り其の一肢を動かす毎に過ちなきやを氣遣ふは師たるもの〻情なり諸子か今日以後の所身に付野陋なる引例を以て諸子に望むは失禮なれとも教授の職にあるもの〻情は實に彼の如きものなり諸子たるもの幸に師弟の關係情誼を忘れす十全會てふ紀念の爲めに設けられたるものによりて長く其の目的を保たれん事を

次て梶川藏重、鵜澤豐吉、吉川祇直、湯本四郎右門、政山竜雄、中西政太郎の諸氏各祝辞を述へられ次て松原三郎君は卒業生一同に代りて謝辞を述へられ尚番場友平、崎達郎二君も謝辞を述へられ次て祝寿に移る滿座將に杯を傾けんとする時君か代の奏樂と共に北條校長謹嚴なる音頭にて天皇陛下の万歳を三呼し一同起立して之れに和し尚卒業生諸君万歳を三稱して更に淡白に學生的に十二分の歡を盡し散會せるは刻鈴九点將に響くの時なりき

●解剖精靈追悼會　十月中旬野田なる大乘寺に於て行はる會せしもの校長主事を始めとし學生

一同幷に遺族數十名なりき午后二時二十余名の僧侶嚴かに讀經する事時余にして北條校長、高安主事、金子教授、村上教授、山崎教授、小川教授、下平教授、佐々木教授、學生惣代河内監次郎氏外か遺族者數名の燒香ありて式を終ふ

●醫學科四年級射擊演習　十一月下旬上野練兵場に行はれ成蹟良効なりしと云ふ

●追悼會　第十一回醫學部卒業生一同は其の將に離散せんとするに當り同氏等に緣故ある師友の不幸にも世を去られし前教授岡部忠君、講師松本善次郎君並に學友富田信義、山丘國太郎、森口專次郎、田所進、吉村松造、和田種助、秋山斌夫、吉村純一、田澤清碩、高峯旬造十君の爲に十一月九日東本願寺別院に於て追悼會を營なる午後二時數名の僧侶讀經を終り次て卒業生惣代番場友平氏、醫學部職員惣代高安右人先生、醫學部學生惣代河内監次郎、卒業生久保武氏、松原三郎氏順次悼辭を朗讀し岡部氏の實弟なる岡部忠一氏の悼辭並に遺族者の燒香ありて式を閉ち別室に於て來會者一同へ茶菓を饗せらる、實に未曾有の美擧と云ふべし

●幹生の任命　第二學期間の幹生左の如く任命せられたり

醫科第四年級　河内監次郎　大塚　正一
仝　第三年級　中西政太郎　中島　擴三
　　河野　勇
仝　第二年級　山崎芳太郎　神坂　勇治
　　富野　佳照　飯塚　忠男
仝第一年級甲組　石黒　均造　片岡　正
　　岩澤　清

仝　乙組　土田久三郎　清水　秀夫
辻村　耕夫
藥學科第三年級　内山忠二郎
仝　第二年級　駒屋　禮二
仝　第一年級　荻尾　正次

●教務課の新設　本學期より臨床講義所に教務課を設け松田菊治氏事務取扱を囑託せらる

●元旦年賀式　金雞曉霧を破りて萬象新に祥烟天に靄さて蕭氣堂に滿つ茲に本校職員學生講堂に會し年賀式を擧げ恭しく御眞影を拜し謹で聖壽の萬歳を祝し奉る

●校長告諭　一月十四日午後二時より無聲堂に於て學生一般に對する諸會合方針に付き一場の演舌あり要は諸會の和合を計り統いて家族的となすにあり結局各級より一名づゝの調査委員を出して調査する事となせり

●終日行軍　北風振ふて窮陰凝閉し積雪脛を沒して征馬進まず是れ將に北國健兒身胆を錬磨するの時なり是に於てか二月四日醫學部第一年級大學豫科第一年級は松任附近に於て仝十日醫學部第二三年級大學豫科第二年級は大野附近に於て終日雪中行軍擧行せられたり

●武道大會　二月十一日(柔道)仝十二日(撃劍)を無聲堂に開かるいつもなから我か醫學部の熱心家の腕前實に見事なりき當日來觀中より多く仕合を挑まれたる諸君ありしも軍佩は常に我校の勇士を指せしは來觀に對しては氣の毒なりしも亦以て我四高學生の勇氣を發揚せるなるべし

●武道再興　本部臨床講義場には柔道部及ひ撃劍部ありしも久しく中止となりしが今度之れを

再び盛んならしめ且つ弓術をも加へ二月初旬より勇ましく「クリニック」の餘暇勝負を競ふもの多し

●木村教授の消息　獨國留學中の教授木村孝藏先生は此頃「フライブルヒ」に轉學せられし由なるか新年左の消息に接したり

謹賀新年

明治三十二年一月一日　獨國「ライプチヒ」にて木村孝藏十全會員御中

野生儀伯林に滿一ヶ年間滯在致居候處留學期二年の中一年は諸方見物の心算にて已に主務省の許可も得たるに付き昨年十月第一着に當地に參り候目下彼の著書を以て有名なる「チーグレル」氏の許にて勉強致居候講議はなかなかなものゝ心切なる人なり四月或は五月には瑞西國次で澳國に至り夫れより一寸なりとも英佛を跨で后ち歸朝可致候大分忙敷心地致候か又諸君に拜眉の期も近しと思へば大ひに樂しく候先は御通知迄尙大抔を擧けて以て諸君の健康万福を祈る

先生の宿所は　Prof. Dr K. Kimura
Bei Frl. meier
Deutschorden strasse 1
Freiburg I. B. Gtermany.

尙ほ卒業生諸君へとて左の如く申越さる卒業生たるもの宜しく恩師の金言に背かさらむ事を務むべし

謹賀新年併而大に祝諸之卒業

明治三十二年一月三日　　木村孝藏

卒業生諸君

十一月十三四日頃の北國新聞よう〳〵近頃到着し閲見すれば新年早々最も愉快なる記事あり是れ即ち諸君の卒業の慶年慶典なり祝宴會にて高安君の陳べられたるが如く野生の如き萬里を距つる孤客も一入感に堪へす諸君の光榮は自らが產せる者なれども亦　聖恩の厚き學校蕭陶の與りて力ありしは勿論なれば諸君は之れを忘れ賜はで益々御勉强あらんとを希望に不堪候且つや最早內地雜居の期も近きにあり目下の規定にては外國の大學にて卒業したるものは我が國にて開業し得ると云ふ殘念なる規定なるが之れを外人に應用するや否やは知らされども兎に角外國の醫師が來りて開業するやも謀り難し併しながら余が今日迄の見聞によれば諸君は右等の者來るとて決して妄りに避易するを要せす只今時日進の醫學なれば少なくも一の外國語學を以て時世に後れぬ樣御研究こそ第一の大切なる事と存候頓首

●會員の勤靜

贊成會員北豐吉君は東京醫科大學撰科へ入學衛生學撰攻

仝　齊藤幸作君は一年志願兵として金澤步兵第三十五聯隊へ入隊、

仝　長井源吾君は同上にて金澤步兵第七聯隊へ入隊、

仝　高岡榮君は陸軍三等軍醫に任ぜられ騎兵第九聯隊附(金澤)を命せらる、

仝　河村多郎君、岩倉兵次郎君陸軍三等軍醫に任せられ步兵第七聯隊附を命せらる、

仝　松浦啓三君も同前にて步兵第三十六聯隊(

●雜報

鯖江）附さを命せらる、

仝　國府金城君も同前にて越后新發田衛戍病院附さを命せらる、

仝　安村順吉君も同前にて步兵某隊（姫路）附さを命せらる、

仝　伍堂嘉一郎君は保險醫に從事中の處先般之れを辭し醫科大學專科に入られ生理化學の研究に從事せらる、

仝　東良平君は舊臘一年志願兵滿期後金澤病院外科に再び奉職せらる、

●第十一回通常會　二月十九日本部眼科講堂に開く午後一時高安副會長開會を報じ幹事河內監次郎氏會計掛より差し出したる明治三十一年度の本會會計の報告をなし次て左の諸話ありたり

有機体ノ構造　金子次郎君

網煙劑離症ノ一治驗（獨乙語）　高安右人君

「コホ」氏新「ツベルクリン」ノ臨床的價値　上田計二君

尙河內監次郎君は奇辨を以て男性「ヒステリー」なる題にて諷刺的慷慨的に會員に注意を與る事一時間半なりき當日小川勝輝君は「年齡」なる講話ある筈なりしも時間の都合上次回に延期せしは殘念なりし講話終りて例により茶菓を喫し散會せしは午后六時なりき

●松本善次郎氏　本校助教授松本善次郎氏は昨年夏季休暇後宿痾頓に聳まり入院治療中なりしが其効なく十月下旬遂に逝去せられたり氏は外科部擔任として多年敏腕を揮はれしが今や亡矣斯道の爲め痛惜に堪へざるなり噫乎人生誰か百年を保つを得んや只其後を紹ぐもの氏の志を辱

めざらんことを期するにあるのみ葬送に當り本會は生花一對を靈前に供し一同冒葬之を吊せり

●水上末之亟君　本校學生仝氏は肺患の爲め歸鄉療養中の處二月七日其訃に接す吾人其志を遂げず齡未だ人生の半に達せずして空しく黄泉の客となれるを悲む

●解剖屍体增加　從來我が醫學部所屬の救恤病室より送らるゝ屍体のみにては實習用に不足を告くる位なりしかは種々の方面に屍体の增加策を繞らせしも尚充分滿足する能はさりしが今學年に至り頓に其の增加を見日下の處にては不足を告けざるのみか反りて過剩となりしは吾か醫學科の爲めに祝すべき事なり之れ主として醫科四年生諸君が多忙なる身を以て特志にも課業の餘暇彼の慈善家小野太三郎氏が收容せる哀れむべき貧民中の不幸なる病者の治療に從事せられしに基くと雖も亦以て高安主事閣下が盡力周到なりし事と教授諸君並に金澤病院醫員諸君が熱心事を助けられしとに依らずんば非さるなり吾人はかくも屍体に富豪なるを誇ると共に諸君の効勞は長く忘れさるを誓ふ尚如何に屍体が增加せるかは乞ふ左表を見よ

明治三十年度　三十一體
明治三十一年度　四十二體
明治三十二年度　二十体（三月迄）

●訂正　第七號本誌に於て寄書欄に掲げしものは原著實驗欄に入るべきものを活版の誤植より彼の如く相成しを以て訂正す

●叙任辞令　十一月十五日以后ノ分

雇申付藥學科副手ヲ命ス　河島　重平

仝　二十一日　陞高等官七等　教授　高山　基重

雇申付藥學科副手ヲ命ス　宮澤直四郎

仝　三十一日

雇申付病理副手ヲ命ス　石森　國臣

十二月十日

叙從七位　上田　計二

二月二日

仝　二十二日　石川縣金澤病院醫員

任第四高等學校助教授　宮川　爲三　外科學　東　良平

皮膚病及黴毒病學　仝　太田他計作

仝　二十八日

叙勳六等授瑞寶章　教授　木村　孝藏　藥物學小兒病學　仝　水野富次郎

醫學部教務ヲ囑託ス

一月四日

講師ヲ囑託ス　小林　文泰

三月七日

仝　九日　陞叙高等官六等　教授　村上　庄太

依願解雇　（病理副手）雇　若林　周三

仝　十日

仝　十二日　叙正七位　從七位　金子　治郎

陞高等官六等　教授　金子　治郎　叙正七位　從七位　高山　正雄

仝　教授　高山　正雄　叙從七位　正八位　高山　基重

仝　十一日

陞叙高等官四等　　校長　北條　時敬

仝　十四日

陸軍歩兵中尉從七位勳六等　礒田　正謙

任第四高等學校教授叙高等官七等

●寄送書目

日本醫事週報　毎號　同　社
醫海事報　仝　同　社
岡山醫學會雜誌　仝　同　會
京都醫事衛生誌　仝　同　社
北越醫學會雜誌　仝　同　社
京都醫學會雜誌　仝　同　會
中外醫事新報　仝　同　社
順天堂醫事研究會雜誌　仝　同　會
日本眼科學會雜誌　毎號　同　會
國家醫學會雜誌　仝　同　會
藝倫醫事　仝　同　會
獨乙語學雜誌　仝　同　社
中央醫學會雜誌　仝　愛知醫學校同會
東北醫學會雜誌　仝　第二高等學校同會
一高志林　仝　第一高等學校々友會
校友會雜誌　仝　京都醫學校同會
研瑤會雜誌　仝　第五高等學校同會
助產ノ栞　仝　日本助產婦會
緒方病院醫事會報　仝　同病院
公衆醫事　仝　私立奬進醫會
井上眼科同窓會々報　仝　同　會
膽胃病研究會雜誌　同　會
成醫會々報　同　會

●雜　報

◉雜報

◉高山教授　法醫學研究の爲め今般本校教授を辭し東京醫科大學に入らる先生の博識を以て足らすとなし斯學の爲奮勵せらる吾人羨慕して止まざる所なり春寒料峭時砂肌願くば國家の爲め自愛あれ

◉高山先生送別會　三月廿五日天晴風靜なり學生及び有志一同金城樓に於て高山先生の爲に送別の宴を開く席定まるや濱口廣海氏起て開會の意を述べ次で眞柄佐一郎石森國臣望月慶作小林茂樹氏等順次送別の辭を述べ終に先生の答辭あり萬歲を三呼して開散せしは午后八時なりき

◉四年級旅行　學術實地視察の爲め醫學科第四年級一同は山碕教授松田教授引率の下に六泊の豫定を以て京坂岡山地方に修學旅行を企て三月廿五日早朝出發同卅一日歸校せり

◉高山正雄氏　廿九日東上せらる

◉上田教授　私用を帶びて廿九日東上せらる

◉森島助教授　院務を帶び向二ヶ月間滯在の見込を以て卅日東上せらる

◉伊庭秀榮氏　福岡婦人科部長同氏は去三十日來澤本校を參觀せらる水原則鳴なる人あり氏の舊友と聞く其折に

打にふれてよめる　水原則鳴

住めば都〳〵と思へども
住は都の忍はれにけり

◉乍憚一寸御斷申上候

雜誌發行期日大に延引致候是れ全く編輯人の事務不調の罪に候へども其處には色々の事條有之候次第

○春寒く越路の花は後れけり

右にて御許し被下度候　編輯員一同

故醫學士岡部忠君

有爲ノ材ヲ抱キ不幸未タ志ヲ成サスシテ病沒ス誠ニ痛惜ニ禁ヘス而シテ遺孤尙幼ナリ前途養育ノ方法亦完カラス哀悼ノ情更ニ深キヲ覺ユ乃チ廣ク義捐金ヲ募リ遺兒ノ敎育資金ニ充テントス謹テ同情諸君ノ贊助ヲ俟ツ

追テ義捐金ハ東京神田區駿河臺鈴木町十六番地土肥慶藏宛御振出可被下候

發起人

高山胤通　井上通泰
加門桂太郎　永井德壽　井上通壽
柏村貞一　中澤信四郎　高橋剛吉　高田繁
岡本武次　土屋良藏　寺田纉　小林文泰
近藤次繁　小川勝陳　栗原永之助　筒井八百珠
千葉彌一郎　金子治郎　下平用彩　島田剛太郎
梅野兵次郎　鈴木德男　魚住以作　內田守一
佐藤勤也　渡邊悌二郎　丸山熊男　村上庄太
山縣正雄　增田知正　佐々木達　櫻三之助
森田楨太　山崎幹

小生儀先般卒業後上京仕リ目下東京醫科大學病理學敎室內ニ於テ勉學研鑽罷在候間此旨辱知諸君ニ報道仕候

東京神田區駿河臺鈴木町二番地
御茶水橋畔東洋內科醫院（高田耕安）內

銻膓　松原三郎

會告

贊成會員諸君は雜誌發刊毎に會費貳拾錢宛本會主計山瀨時吉宛にて必らず御納め被下度願上候

又贊成會員にして會費未納の諸君は整理の都合有之候に付大至急御送附願上候

贊成會員諸君は御動靜成るべく御通知被下度願上候

贊成會員諸君は實驗等盛んに御投稿相成度願上候

次号原稿締切期限は來る四月二十日限とす會員諸君奮て御投稿あれ